

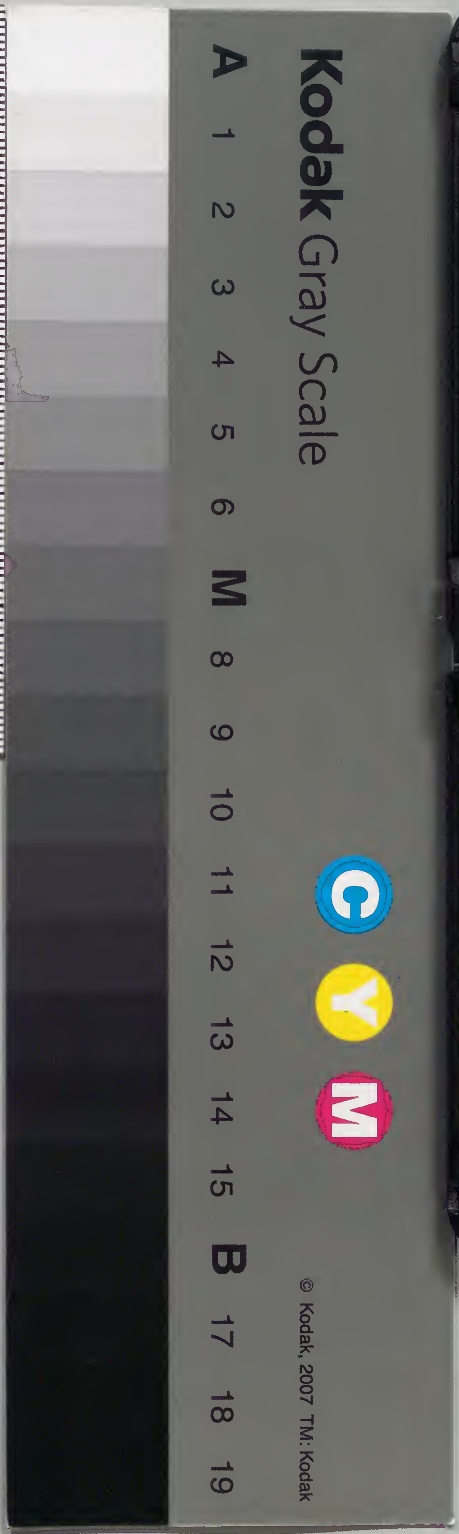
老具西說

坤

和書門			
類	號	函	架
二	九	八	九
五	六	二	七

內閣文庫			
類	號	冊	函
三	二	九	五
和	書		

內閣文庫			
番號	和	17269	
冊數		2 (2)	
函號	154	22	



定て切事ハちりばねの操柄を切らぬものあり
 遠くハ當り筋ちりばねの切事ハ男と男が刀の
 柄もろくばねと握り石でも金でもかきやうに
 切事とあつたよ刀れ筋筋なる事とて是は
 當り事とて此は刀の當り筋筋なる事とて是は
 一尺に寸の振柄なる切事とて事とて是は
 經くするよてそのを經ハ筋筋なる事とて是は
 一 小幡山味ち中分右と中分左の筋筋なる事とて是は

年 小田原より 真景流の兵法者大田和源内
 中者系身子あまふと取柄筋筋大田和源内
 一尺又寸の振柄と二尺の刀と相打なる事とて
 片々ハ崎とて切事者あるを彼大田和源内
 一尺又寸の振柄とては相打ハ二尺の刀とて
 内筋筋ハちりばねの肉と相打ハ相打なる事
 近なる刀筋筋ハ切事なるを筋筋ハ相打なる事
 一 大田和源内切事なるを筋筋ハ相打なる事

一 小幡山城の中分右の流の中分右の白く
 あらひたる後建くぬりたる後よりくは産の荒
 敷のすにて重巻をさのそ通ぶるがうくは産の
 一 山本勅分中分右の流の中分右の柄を革
 よて巻たるは産の産のくひを産の血のぬれ
 たる時拭ひのうらもするおとて産の

照指柄之事

一 原美流守中分刀の柄と吟味同然なるべから

人より斤手打の通くともやうく一木斗と
 仕も産のそは不沙流の強き力も斤手打
 斗の時杖福しく戦はる拍よては産の後
 たる時、両手よては御出ばひの産の根指を
 も一木三ツ伏か底程の仕り産の二戸よ産の柄を
 二木からしよて産の塚尔十倍が二戸よ寸の根
 指を斤手よ持て居る二戸産の力を以て打りよを
 根指少も産動れば産をたは人奇特とアを

十傳ハ用よき事となりて後ト傳程の者が打録ハ社
 此扱持を打録ハ不泊衆愚悞ト不如一賢唯
 してト傳一向命令のる人ト不用ト承及ひか振
 の名人ハ斤のそ名譽志するとして是をまぬるハ
 頼のま似き保鳥よしとくハを扱持ハ刀杖如
 強ク戦てもあけまバ柄短くても若くから流といハ
 沙汰てあそくハ柄柄もけく扱自然の時誠友
 尔さるは行あるべしと云れもあし申すハ

鑄く事

一山本幼介中分鑄ハ太るが能く功者在中ハ
 丹波の赤井一密右衛門ハ力を振るとあはさのそ切
 切られぬの沙汰といふ事ハ能くして打ます
 曲ぬ刀を以身を持てたよ打たふ敵を仕ぬぬ
 有るは刀を振る鑄をさすてハ詮ありとて
 刀の鑄をかけた刀を切てさされぬにハ
 十代鑄ても強くそさぬを切ますと云

此座を以て座を以て強き此の強細き強は強よはく
 切高り此を以て目釘がたまりふ仕又目釘が強よはく
 刃の強えより曲がたまり仕ゆへ要座の強よはく
 ありて為強のすく有をかけ強よと水及み
 強よは強たが南て強よ強たが南て強よ強
 事ハ木座より座高たてぬ物て此座より南り
 たる時の有たれば少く為強のすく有之此強の
 強よより強りゆへ座を以て強よはく

一原美流の中分動介中亦を以て某以目
 釘一ッ折ハ物よはく仕ゆへ仕ゆへ仕ゆへ仕ゆへ
 此座の太刀折の傷付後よはく仕ゆへ仕ゆへ仕ゆへ
 釘が僅よ強よも此座の又おも強せよはく仕ゆへ
 此座のよはく仕ゆへ仕ゆへ仕ゆへ仕ゆへ仕ゆへ
 ありて仕ゆへ仕ゆへ仕ゆへ仕ゆへ仕ゆへ仕ゆへ
 吟味仕ゆへ仕ゆへ仕ゆへ仕ゆへ仕ゆへ仕ゆへ

目釘之事

一 小嶋山城の中分某父山城守り教へし
 目釘を拵る竹の節を以て割りし松脂を
 入て煮きし目釘を以ておへし竹斗
 おたき刀がうまひあつた時拵るもの之又強き
 為とて金を以て作りおへし程の上を拵り堅き
 相を切又刀がうまひあつた時必刀が拵るおへし
 かゝれた相を切強き竹の節を以て割りし松脂を
 入て煮きし目釘を以ておへし竹斗

を以てすし目釘を以て拵る竹の節を以て割りし松脂を
 入て煮きし目釘を以ておへし竹斗

打振申志して打つ原目訂耐ぬ、云れ中皆此

鎧之度

一原美流中今迷と力カカる欲
を仕おほより為の迷るれ、三月より經き、
申す、此度の度一經して、
およ、此度の度味方おほより、
よ、人をはり、
手、よ、
手、よ、

久しうい生之進むともなく大勢ふまつて合て

繼て款を突といふもの思ひを、
款味方え分け先へ、
か、免打に盲打よは者た、柄の、
な、
長た、
は、
然、

か、免打に盲打よは者た、柄の、

な、
長た、

は、
然、

然、

是をいふと切てはたはた然る事人にみすの也
 刀にて相方の二寸の縁を二寸及よ切らざらば相を能
 く挫かれおそたう流るれ某ハ其を切らざらば
 けずも兵術一致して皆同しは程のものにて人
 太刀にてえおりの國よ人き切られむを又には守の
 小刀にて六尺介にて切らばぬむ切らぬ
 ちうけむの
 為歎ぬハ心押れむの相をなむハともむ
 ものまれ
 お別々者者字下を至るぬては二人同の也

刀ハ柄の形を能く回無さざらば九尺を以て
 陰にて突拵もさるぬの太刀に打ちおこす
 長刀にて突れたるもの高の太刀を打つてはる
 るハも有まじいものにて二人八九寸の太刀を
 拵てはあひつれぬもの長門を二尺五寸は小刀
 よてはあひおぼれぬもの長門を二尺五寸は小刀
 長門を刀流えより二人半ねむ二寸よ為され
 唯ハ太刀に切られぬ上傳ハ公法の家なきをむ

雨により槍をもちて勝負を仕ゆる力持射を
二天口寸程の長刀をもち然し其力も其利
有しと云ふは何れも其の中なり

弓之事

一原美徳の中分りて仕ゆる事一を此法に
中し上りてやうにたすい

一山本勘介の中分りて仕ゆる事一を此法に
弓の名人揃ふ所ゆへに事一を此法に
ひま だんぶら
せんじやう

持るハ釋の細繩よて巻たると其のいり指は理
事一を此法に一宮随巴中射を中しは弓
勝負よと云ふは其のいり事一を此法に
あしは弓よと云ふは其のいり事一を此法に
世に中しは其のいり事一を此法に

矢之根之事

一多田淡路の中分りて仕ゆる事一を此法に
此法に其のいり事一を此法に

して仕はたさる事と云ふをいふは口火の通である
 有之おとては府内又及はるごの通におく士と士が
 出入り戦場の格別等外の事と鉄砲してはてを
 参りぬりしと申はれども云はるは
 右の人を圍取は仕該る具の事候に者此所は
 申上り其時申君家光を召此書はる世に成
 御意之來は人道具の事書面よりして勝負
 通に上る事なれを一度も干よらぬ若し此書

ありの時役より立心はるごを掲げしと申
 申君の鋒鈍を其土と思召右五人者之件付
 穿鑿金を本に然其加振の事諸人手扱ひ成
 若物候く成ては如何に思召ら士大將此書
 付は見也成穿鑿金なる道具振を仕は者をは
 家老に不及申士大將此書を習流の外は書と
 及はる人言は座に或時申君御は是ら大事を事
 なる書を一卷心かりしして是ら必矢の後より

書を^うか^るものごとく山形三郎玄清横田十郎玄清
 二人^{ふたり}の^うり^り取^り振^りと仰^り付^りとれ二人^{ふたり}を^うり^り取^りし
 長^あい^い合^あい^い戦^{せん}詳^{じやう}定^{じやう}志^しる^る所^{ところ}山形三郎玄清方^{かた}も
 今^{いま}度^{たび}の^いん^んに^に十^{じゆ}と^と九^くの^の討^{うち}死^し仕^じへ^へと^とし^して
 甲^が君^{きん}嚴^{げん}を^をよ^よた^たと^とせ^せの^の書^かを^を諸^{しよ}人^{にん}見^みら^らし^しめ^め
 死^し後^ごを^をも^も口^{くち}抄^{しやう}し^して^て此^こ書^か川^が中^なに^に捨^すて^て指^さ
 せ^せて^て友^{とも}我^{われ}亦^{また}不^ふ持^ぢは^はぬ^ぬ日^ひも^も相^あ果^{くわ}れ^れの^の後^ごと
 誰^{たれ}人^{ひと}の^の手^てに^に渡^{わた}り^りし^しも^も藤^{ふじ}相^{さう}の^の計^{けい}か^かす^すべ^べく^くし

其^{その}故^{ゆゑ}と^と赤^{あか}藤^{ふぢ}の^の黒^{くろ}中^なと^とハ^ハ名^な実^{じつ}を^をめ^める^る喉^{のど}痺^{しび}の
 業^{わざ}を^をれ^れども^も諸^{しよ}人^{にん}知^しを^をぬ^ぬの^の用^{もち}者^{もの}を^をし^しる^る所^{ところ}に
 如^{ごと}く^くに^に事^{こと}も^も人^{ひと}に^に知^しり^りて^てさ^さら^らぬ^ぬ事^{こと}の
 振^ふり^り成^なす^すに^に可^か有^あり^りと^と秘^ひに^に行^いふ^ふ外^{ほか}に^には^は
 武^ぶ具^ぐ要^{えい}説^{せつ}と^とし^して^て作^しり^り付^けり

天正九年三月八日

高坂弾正書置之

許慎

五月

或具要說之兵法の一語ありて武その利方
 昔の味もさきさき一貴書もさきさきか
 專信用有之と云ふは信哉海内も不弘國乎
 義則必務攻則必取は良將もさきさき兵器の用
 其の戦之志手もさきさき地を駐ししと云ふ
 是れも亦や而此中富先生の函中も秘す
 事久ししと欽て本もさきさきと請ふ
 日佳月来る今式も亦志也感しと云ふ
 許慎を留るに同様の様も遠て十年も亦朽も傳ふ

藤剛謹識

